

琉球大学学術リポジトリ

夏山の手入れ

メタデータ	言語: 出版者: 琉球大学農家政学部 公開日: 2011-06-23 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 諸見里, 秀宰, Moromizato, Shusai メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/20.500.12000/20662

夏山の手入れ

夏は森林の手入れの時期です。高温多湿の夏は林木の生長にとって一番大切な時期なので、山の手入れを怠らないようにつとめましょう。

植付けられた苗木が、生長していくためには、生育空間、光線、養水分などと共に、雑草木との激しい競争や旱魃、寒さ、風などの気象上の諸害にうちかかっていかねばなりません。そのために、私達は下刈り、つる切りなどを行なって、苗木と雑草木との競争をなくし、苗木の正常な生長をはかる目的でこれらの作業を行います。殊にこの作業は、苗木が植付けられてから、成林するまでの造林の初期において最も大切な作業です。

沖縄のような高温多湿な気象条件下では、雑草木の繁茂が旺盛なので、下刈り、つる切りの作業は回数を多くして、雑草木によって圧されるのを防ぐことが林木の正常な生長のために必要と思われる。

苗木が健全な生長をするためには、相当量の光線が必要です。苗木が生長を継続するためには、30%以上の陽光を必要とし、良好な生長は50%以上ではじめて可能であるといわれている。殊にマツ類では、35~75%の光度で最大樹高生長がおけるといわれている。このように苗木の生長には陽光が必要なので、雑草木の繁茂した下では陽光が著しく不足し、耐陰性の大きい樹種でも健全な生育をなしえないと考えられる場合が多い。柴田氏は下刈地と不下刈地の日照度を比較した場合、全刈地の光度を100とすると不下刈地は最大の時でも20%以下で、日中の全平均は10%内外にすぎなかったと報告されている。柴田氏の調査は、下刈が苗木の生長にとっていかに大切かを示すものといえよう。即ち、下刈りは苗木の生長に大切な陽光の邪魔者である雑草木の排除が大きな目的といえよう。

更に苗木と雑草木との根系の競合による水分の競争関係を排除するためにも必要である。下刈地と不下刈地の水分関係については明らかでないが、水分上の競争関係の緩和の効果も忘れてはならない大きな要因といえよう。下刈りが行なわれることによって地表面からの水分の蒸散がふえることは考えられるが、刈りとられた雑草木を敷草として用いることによって地表蒸散を抑制することができるでしょう。

このように、下刈りは生長に有害な雑草木を刈払って、苗木を健全に生長させるためのものであるから、生長の一番旺盛な時期に行なうことが大切である。苗木の生長の年経過は、樹種によっても異なるが、沖縄では冬期間を除いて年中生長しているように思われる。殊に春から夏にかけて多くの樹木は旺盛な生長をしているようなので、その期間中に下刈りを行なう方が望ましい。気温の低下する晩秋や冬季になってからの下刈りは、苗木の生長に役立たないばかりでなく、気象上の諸害をうけやすくなるのでさけるべきである。4月以降の沖縄は、雑草木の生長が旺盛なので、刈払ってもすぐに回復して苗木を圧するようになるので、植付後数年の間は、年3~4回の下刈りが必要だと思われる。殊に直接造林をしているリュウキウマツでは、下刈りの大切なことはいうまでもない。下刈区と不下刈区のヒノキの伸長生長の状況について坂口氏の調査によれば、1932~1937年までの6年間の伸長量は、不下刈区が88mに対して、下刈区は140~169mの伸長生長をしており、およそ1.5~2倍の生長をしていることがわかった。これから考えても、下刈りがいかに大切かを知ることが出来る。

現在の造林技術の根本義は、苗木と雑草木との生存競争を排除して苗木の健全な生長をはかることにある。沖縄のように高温多湿で植物の生長の早いところでは、尚更下刈りの回数をふやすべきでこそあれ、下刈りを怠ってはいけないと思われる。

(諸見里秀幸)